

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：17401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19988

研究課題名（和文）「詩人と思想家の国」の新しい系譜 詩と哲学の協働と文化アイデンティティ

研究課題名（英文）Neue Genealogie des Landes der Dichter und Denker

研究代表者

益 敏郎 (Eki, Toshiro)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授

研究者番号：80908195

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツの歴史的転換点において文化アイデンティティを再構築した詩人と思想家に着目し、仏革命期において歴史の自己理解を刷新した哲学者詩人の作品、ドイツ帝国の誕生に歴史解釈の破壊性と創造性を示した詩的哲学、世界大戦期における詩的、哲学的使命を帯びたドイツ民族という新しいイメージを明らかにした。当初予定していた1968年闘争以降の現象としての神話論の復権というテーマについては成果発表にいたらず、またすべての成果をまとめて「詩人と思想家の国」の新しい系譜の全体像を提示するにはいたらなかったものの、個々の成果において、近代ドイツにおける詩と哲学の協働の実態およびその歴史的功罪を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、「詩人と思想家の国」とも言われるドイツにおいて、詩人と思想家の協働を新たな観点から捉え直し、近代社会において詩と哲学が担ってきた伝統性、合理性、主体性、単一的アイデンティティの批判という特異な役割を、大きな歴史的枠組みにおいて把握することにある。これはドイツの精神史のなかに新しく系譜的連関性を発見するにとどまらず、情感豊かに芸術を愛し崇高な理想に熱中するというよく知られた「詩人と思想家の国」ドイツの牧歌的イメージを覆す内容を持つ。この点に本研究の社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the contributions of poets and thinkers who played a significant role in reshaping Germany's cultural identity during pivotal historical periods. It sheds light on the works of philosopher-poets who renewed the understanding of history in the age of the French Revolution. Additionally, it explores the realm of poetic philosophy, which showed both the destructive and creative aspects of historical interpretation at the birth of the German Empire. Moreover, the project uncovers a new image of the German nation, wherein poetic and philosophical missions were intertwined during the World Wars. While the project did not achieve one of the objectives of exploring the rehabilitation of mythology after the 1968 protest, nor did it present a comprehensive portrayal of the new genealogy of the "Nation of Poets and Thinkers," it successfully elucidates the collaboration between poetry and philosophy in modern Germany and its historical significance.

研究分野：近代ドイツ文学、思想史

キーワード：ドイツ文学 ドイツ思想史 詩人と思想家の国 詩と哲学の協働 系譜学的研究 文化アイデンティティ形成

1. 研究開始当初の背景

(1) 「詩人と思想家の国 (Das Land der Dichter und Denker)」という言葉は、ドイツの豊かな文化伝統(抒情詩、歌曲、中世の世界を内包するメルヒェン、人間的自由を体系的に打ち建てた観念論哲学)を誇る慣用句として知られる。一方で、この牧歌的イメージとは裏腹に、ナチスにいたるドイツ「特有」の国民性(現実軽視の理想主義、形式的な官僚主義、潔癖な倫理性等)を表しているとも言われる。しかしながらこの二つの相反するイメージは、ナチズムをドイツの歴史的展開の断絶点とみなし、ナチス政権崩壊の1945年を大きな転換点とする見方によって支えられている。それに対し本研究は、戦前と戦後を貫いて継承される詩人と思想家の協働が存在したのではないか、その通時的な展開を「詩人と思想家の国」の新しい系譜として描くことができるのではないかと、という問いのもと構想された。

(2) 本研究のもう一つの出発点は、20世紀末にフランスの思想家アラン・バディウとフィリップ・ラクー＝ラバルトの間に起きた論争にある。両者は現代における詩と哲学の役割をめぐる鋭く対立したが、1800年頃から、ドイツを中心に詩人と思想家が、自らに近代科学や合理性に対抗する歴史的使命を与え、強い威光を放った特異な一時代が存在したこと、そしてこここそ、かつてナチズムに行き着き、現在の権威主義や偏狭なナショナリズムとしても現れている問題、すなわち自由なデモクラシーにとって脅威であり続けている問題に向き合うための着手点がある、という点では意見の一致を見たのである。本研究は、この論争があぶり出すドイツの特異な一時代を、近代科学や合理性がもたらす人間の危機を洞察し、批判的な歴史意識において新しい世界像を描き出そうとした詩人と思想家の協働の系譜において描出し、近代社会が文化アイデンティティを形成する際にはらむことになる問題性と可能性を検証すべく構想された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、18世紀以降のドイツにおいて、詩と哲学が協働的、相互浸透的な関係において、ともに科学的公式や合理的認識とは対立する難解な真理を保持し、それを支える特権的な役割を担ってきたことを、歴史的な連続性において示すことである。これは「詩人と思想家の国」というドイツの牧歌的イメージを覆すだけでなく、文学史と思想史を横断してドイツ精神史のなかに新しい系譜的連関性を確立し、ナチズムにおいて一度断絶したとされる「詩人と思想家の国」のイメージを、今までにない形で描き出す試みである。

(2) 本研究が提示する系譜は、詩と哲学が単一的ではないアイデンティティを構想し、排他性そのものを打ち壊す新しい積極的な「物語」を生みだそうとしてきたことを明らかにする一方で、民主主義社会が文化アイデンティティを強迫的に構想せざるをえなかったこと、そしてそれがときにナチズムに接近するような政治性すら発揮し、戦後社会においても作用し続けていることを示す両義的な系譜でもある。それゆえ本研究は、全体主義やナショナリズムに対して詩と哲学がどのような関係を結んできたのか、またその政治的排他性に対抗しうる文化の潜勢力と構想力を保持するための課題は何かを、近代ドイツ精神史の系譜学的探求を通じて考察することを目的とする。

3. 研究の方法

詩人と思想家による文化アイデンティティをめぐる取り組みを扱うべく、その意識が先鋭化される歴史的な転換期、すなわち仏革命以降(1)ドイツ帝政期前後(2)世界大戦期(3)68年闘争以降(4)という四つの時期にフォーカスを当てて研究を進める方法を取る。またこれらに並行して、アラン・バディウとフィリップ・ラクー＝ラバルトの間に起きた論争や、「詩人と思想家の国」の概念史など、本研究のフレームワークをなす研究(5)も行う。

(1) フランス革命の影響で、政治制度、社会構造、文化状況における大きな転換期において、自己の体験や感情を歌う抒情詩ではなく哲学的言説に接近した哲学者詩人の存在に着目する。具体的には、1790年代後半のフリードリヒ・シラー、ノヴァーリス、フリードリヒ・ヘルダーリンの作品を対象に、彼らがいかにドイツの歴史的自己理解を刷新する詩作を行ったのかを明らかにする。

(2) ナショナリズムが高まったドイツ帝政期については、フリードリヒ・ニーチェに着目する。ニーチェ哲学の近代的歴史学への批判的考察、新しい統一的民族を創出するという目的を持つ芸術思想などを取り上げる。そしてこれらが近代詩人の理論や実践とどのように結びつくのかを示すことで、詩と哲学の協働と民族的アイデンティティ創出の欲求が結びつく一例とする。

(3) 20世紀前半に現れた、詩人を先導者とし、形而上学的使命を秘めたドイツ民族という新しいイメージが、第二次世界大戦まで受け継がれていく展開を追求する。具体的には、第一次世界大戦期のゲオルゲ・クライスのテクストを分析し、それが第二次世界大戦期のマルティン・ハイデガーの思想に流れ込んでいく展開を示すことで、詩と哲学が新しい文化アイデンティティを構想しつつも、強い政治性を発揮することになった側面を明らかにする。

(4) 68年闘争において、戦後社会で温存されてきた保守的な文化伝統が批判されたことによって、むしろドイツ的伝統の見直しが進み、否定的な評価を下されてきた神話論の復権が進んだ展開を、ハンス・ブルーメンベルクやマンフレート・フランクの著作を対象に明らかにし、さらにいわゆるニューエージ運動や新興宗教の広がりなどの時代背景と関係づけながら、この現象を世界的な文化潮流のなかに位置付けることも行う。

(5) バディウとラクー＝ラバルトが対立した論点を整理し、詩と哲学の使命にどのような特徴づけがなされ、それがいかなる歴史的条件のもとに規定されることになったのかを明らかにする。また「詩人と思想家の民」という類似の言い回しが生まれた歴史的背景と、それが定着し拡張していく展開を整理し、本研究が提示する「詩人と思想家の系譜」との関係性を明確にする。

4. 研究成果

上記した研究方法(1)～(5)に沿って記す。

(1) この時代区分においては、二つの研究成果が生まれた。研究論文「歴史を語る詩人たち シラー、ノヴァーリス、ヘルダーリンの歴史哲学的ポエジー」(『ヘルダー研究』第25号、2023年、印刷中) また同タイトルの学会発表(日本ヘルダー学会夏季研究発表会、2021年8月)は、1790年代後半に相次いで書かれたシラーの『散歩』、ノヴァーリスの『夜の讃歌』、ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』を、歴史哲学的ポエジーと名付け、伝統的な歴史イメージを変革し多面化する文学的想像力の一例として提示する研究である。この歴史的ポエジーは、同時期に形成されつつあった観念論や芸術理論の歴史哲学に対する先駆性を示すだけでなく、19世紀において実証主義、経験主義へと硬直化する歴史学から逸脱していく歴史的想像力のひとつの源流をなすものであり、詩と哲学の協働の初期の例として明らかにされた。また研究代表者が編著者を務めた論集『「詩人たちの時代」の終わり? ヘルダーリン、ツェラン、そしてバディウ』(日本独文学会、2021年)の第一章「神なき時代の「すべてよし」 バディウの「詩人たちの神」とヘルダーリンのパトモス讃歌」では、ヘルダーリンが当時の神学や、聖書解釈学、啓蒙主義的進歩史観に対して、世界の偶然的で多面的な成り立ちを肯定するモチーフを編み出していたことを明らかにした。これは本研究が目指す、単一でないアイデンティティを構想し、排他性そのものを打ち壊す詩的想像力の実践を示す成果である。

(2) この研究成果は、研究論文 „Zur kritischen und poetischen Kraft der Deutung. Die Auseinandersetzung mit der Geschichte bei Hölderlin und Nietzsche“ (*Neue Beiträge zur Germanistik*. 165. Band, 2023、印刷中)において発表される予定である。これはニーチェとヘルダーリンが同時代の歴史性に関する概念を批判し、歴史解釈というモチーフに批判的かつ創造的な力を与えたという共通性を持つことを示す研究である。ヘルダーリンは、シラーの普遍史構想を批判し、因果的連鎖で結びつけられる出来事の歴史的連関を断ち切り、別の新しい連関を打ち立てる力を詩に与える。この構想は、伝統的な歴史イメージを変革する「解釈」そのものを詩作として取り込み、『パンとぶどう酒』や『パトモス』において実践された。ニーチェは『反時代的考察』での第二論文でヘルダーリンと似通う歴史性批判と詩的想像力の主張を行い、世界から理性が切り捨ててしまった意味的過剰状態を取り戻す「解釈」というモチーフを後年発展させることになった。これはヘルダーリンとニーチェが近代歴史学の整う19世紀という時代に、実証的、合理的な思考を破壊する詩的想像力を「解釈」というモチーフにおいて実践しようとしていたこと、一方でこれがなおも実現しえていない統一的民族を生み出そうという欲求に裏付けられていたことを、歴史的連続性において提示する研究成果である。

(3) この研究成果は、学会発表「「ゲーテの民」にして「ヘルダーリンの民」 ゲオルゲ・クライスにおける Volk 概念について」(日本独文学会西日本支部研究発表会、2022年11月)において発表された。1915年にノルベルト・フォン・ヘリングラートによって示された「ヘルダーリンの民」という概念は、ドイツへの愛国的情熱の刻印を受けながら、一方でギリシャ性へと開放され、モダニズム的言語感覚を基盤とし、言語を司る詩人が先導者となる民族性イメージである。これは同時代のものとは異なる独自の民族概念であり、ハイデガーの「詩作/思索する民族」「形而上学的な民族」というドイツ民族観へとつながる。これは、ドイツ民族概念の知られざる歴史展開を明らかにし、「詩人と思想家の国民」が時代批判をともなう救世的な民族イメージとなり、強力な政治性を放った例を明らかにする研究成果である。

(4) この時代区分における研究成果は、研究調査を進める過程で、「詩人」(Dichter)概念が批判され、代わりに「作家」(Schriftsteller)概念が浮上すること、「知識人」(Intellektuelle)

が「詩人と思想家」と競合する形象となり、戦後社会において重要な役割を担うようになることなどの新しい発見が得られ、当初の計画を変更し1968年前後の言説史を改めて整理し直す研究を行った。それは 研究論文「ペーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』における現実の発明

日常、家族、デモクラシーの物語」(『人文科学論叢』第4号、2023年)、 研究発表「ピエール・ベルトー以降のヘルダーリン研究とドイツ的啓蒙の行方」(日本ヘルダー学会夏季研究発表会、2022年7月)、 研究発表「「父の不在」の不在 ペーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』の伝記批判的方法」(日本独文学会春季研究発表会、2022年5月)を通じて行われた。と

では、戦後文学の作家が1968年の闘争をどのように総括し、また18世紀末以来のドイツ文化の伝統をどのように受容したのかを、ペーター・ヘルトリングを例に明らかにした。では、1968年前後を境としてヘルダーリンをめぐる言説に大きな転回が起こり、ドイツにおける啓蒙主義が独自の展開として評価されるようになったこと、それにともない他の西欧諸国に比べて不当に評価されてきたドイツの市民社会の見直しが行われるようになったことを明らかにした。これらの研究の結果、1968年以降は確かに「詩人と思想家」の系譜を引き継ぐ動向が見られるものの、それらを戦後民主主義の市民社会の理念へと近似させる方向性を持つことが明らかになった。

(5)この研究成果のうち、本研究が提示する系譜の時代区分について、研究代表者が編著者を務めた論集『「詩人たちの時代」の終わり? ヘルダーリン、ツェラン、そしてバディウ』(日本独文学会、2021年)の序論で整理を行った。バディウが提示し、ラクー＝ラバルトと論争に発展することになった「詩人たちの時代」(哲学者が詩を崇拜した時代)の概念は、本研究が問題とする詩人と哲学者が協働した時代と完全に一致するわけではないものの、多くの点で重なり合うのである。「詩人と思想家」とドイツ性についての概念的展開については、(3)で述べた Volk 概念をめぐる学会発表で明らかにした。それはシラー、フィヒテ、ラッサールらが掲げた人類普遍的使命を帯びた国民イメージに始まり、19世紀の歴史的展開のなかでハイネやマルクスが批判したようにビーダーマイアー化し、やがて「法官と処刑人の国民」(Volk der Richter und Henker)というイメージへと転落するという展開である。本研究が示す「詩人と思想家の国」の系譜は、これらのイメージに対して批判的な構想力を保ちつつ、やがて自らに秘められた形而上学的な詩的、哲学的使命を与えるにいたる系譜である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 益 敏郎	4. 巻 4
2. 論文標題 ベーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』における現実の発明 日常、家族、デモクラシーの物語	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文科学論叢	6. 最初と最後の頁 159-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益 敏郎	4. 巻 25
2. 論文標題 歴史を語る詩人たち シラー、ノヴァーリス、ヘルダーリンの歴史哲学的ポエジー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヘルダー研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshiro EKI	4. 巻 165
2. 論文標題 Zur kritischen und poetischen Kraft der Deutung. Die Auseinandersetzung mit der Geschichte bei Holderlin und Nietzsche.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Neue Beitrage zur Germanistik	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 益 敏郎
2. 発表標題 「父の不在」の不在 ベーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』の伝記批判的方法
3. 学会等名 日本独文学会春季研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 益 敏郎
2. 発表標題 ビエール・ベルトー以降のヘルダーリン研究とドイツ的啓蒙の行方
3. 学会等名 日本ヘルダー学会夏季研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 益 敏郎
2. 発表標題 「ゲーテの民」にして「ヘルダーリンの民」 ゲオルグ・クライスにおける Volk 概念について
3. 学会等名 日本独文学会西日本支部研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 益 敏郎
2. 発表標題 歴史を語る詩人たち シラー、ノヴァーリス、ヘルダーリンの歴史哲学的ポエジー
3. 学会等名 日本ヘルダー学会夏季研究発表会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 益 敏郎 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本独文学会	5. 総ページ数 92
3. 書名 「詩人たちの時代」の終わり? ヘルダーリン、ツェラン、そしてパディウ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------